詠む広場

毎日俳壇

片山由美子 選

搦め手は梅見る人で混みあひぬ
大阪市　福永　都女

△評▽梅見客でにぎわっているのは城であることがわかる。軍勢が押し寄せるからめ手（裏門）だったら大変なところという面白さ。

病室の窓を隔てて朝桜
葛城市　久保　政子

△評▽窓越しであっても桜を見られるのはうれしい。目覚めて励まされる思いだったことだろう。

ポンペイの劇場跡や草青む
伊賀市　福沢　義男

母親のそばでままごとうまごやし
鎌ケ谷市　海野　公生

踏切に鉄の匂ひや春時雨
平塚市　日下　光代

芽柳や瀬音にまじる鳥の声
西宮市　平田　あい

菜の花の咲き放題の畑かな
藤沢市　原島　吉光

古賀まり子逝きて十年聖五月
東京　東賢三郎

対岸は光の中に春しぐれ
東京　高木　靖之

おぼろ夜やひとりの部屋の灯を点し
東京　小栗しづゑ

小川　軽舟 選

春愁やガラスコップの薄き陰
我孫子市　矢澤　準二

△評▽白いテーブルクロスに透明なガラスコップの陰がある。それをぼんやり眺める作者の心にも淡い陰がさしている。

山笑ふのみの故郷に友一人
静岡市　安藤　勝志

△評▽帰ることもすっかり減った故郷。それでもあいつがいると思うとなつかしい。

断崖に寄る波緩し風光る
加古川市　栫　玲香

春暁や朝刊すでに読み終わり
土浦市　今泉　準一

山風に湖風に咲く辛夷かな
岸和田市　妙中　正

菜の花や飛行機雲と一つ星
須賀川市　関根　邦洋

空元気でも元気は元気山笑ふ
東京　鈴木真理子

陽炎やラリーの続くテニス場
我孫子市　桑原真喜子

つちふるや絵筆の水のうす濁り
福山市　仲間　春海

ポスターの都をどりに春の雨
広島市　西山さちゑ

西村　和子 選

和簞笥のすうっと開く春の昼
川越市　益子さとし

△評▽かちりとも音をたてずに開くひきだしからとりだしたのは花衣か帯か。春の昼の静けさと妖しさがただよう。

春の雲流るる方へ歩むかな
八街市　山本　淑夫

△評▽春の晴れやかな気ままな気分を表した句。目的もなく急ぐ必要もない足取りが見える。

土あれば日溜りあれば犬ふぐり
宗像市　木村　映子

夕さりてなほ連翹の花明り
武蔵野市　渡辺　一甫

永き日のソファーにルーペ雑記帳
郡山市　井上　博

疏水よりそぞろ歩きの花の道
伊勢市　古野　政木

花冷や卓にこつりと鍵の音
大阪　芹澤　由美

消印はハイデルベルグ花ミモザ
我孫子市　桑原真喜子

静静と玉砂利踏みて春日祭
香芝市　河野　嘉雄

数寄屋まで飛び石伝ひ水温む
西東京市　永島　忠

井上　康明 選

チューリップ幸多かれと咲き誇る
川崎市　伊佐敷眞弓

△評▽赤、黄、ピンクと何種類ものチューリップが明るく咲いている。花を楽しむ人が幸せであるようにと、語りかけるようだ。

指笛に応ふるやうに囀れり
奈良市　伊東　勝

△評▽少年が吹く、歌うような指笛を想像した。小鳥たちはそれに応え、生き生きとさえずっている。

みづうみを船渡りゆく花菜畑
岸和田市　妙中　正

西風に白雲が飛ぶ木の芽時
唐津市　梶山　守

図書館に本の匂ひの朧かな
西東京市　岡崎　実

入園の子はまだ一人すべり台
小田原市　林　梢

峰分けて老鶯の声交はらず
横浜市　斎藤　山葉

天界に一木ささぐ紫木蓮
佐倉市　松戸　文彦

介護タクシー止めてしばらく花の下
八女市　水町　好江

ゲルニカの牛と眼の合ふ春の宵
南房総市　山根　徳一

新刊

＜句集＞

◇浅川芳直『夜景の奥』　第1句集。東北に腰を据えた一冊であり、独特ですがすがしい写生眼が光る。△冷房車出てよみがへる雨の音▽△朝刊を光のよぎる寒の入▽△蕗（ふき）の葉に水の濃淡走りたり▽（東京四季出版・2200円）

◇常原拓『王国の名』　第1句集。季語に対する信頼と吟行の成果が際立つ。△ヴィオロンのレッスンの日の関東煮（かんとだき）▽△水が水叩（たたく）音して冬薔薇（ふゆそうび）▽△妻となる人の来てゐる十夜かな▽△遠雷の三面鏡にとどきをり▽（青磁社・2200円）

◇鈴木総史『氷湖いま』　第1句集。赴任地の北海道でじっくり熟成された一冊。華やかな風土詠と呼べる作品に好感が持てる。△わたつみの光なら欲し葡萄（ぶどう）棚▽△さざなみは船に届かずカーディガン▽△灯を点（つ）けて塔の全貌夜鳴蕎麦（よなきそば）▽△メロン食ふたちまち湖（うみ）を作りつつ▽（ふらんす堂・2750円）

（俳人・櫂未知子）

＜歌集＞

◇高野公彦『歌の魅力の源泉を汲（く）む　わが意中の歌人たち』　近代から現代まで子規、牧水、茂吉、馬場あき子、河野裕子、小島ゆかり、坂井修一、水原紫苑など、機会があって書いて来た18人の歌人論を収録。歌を熟読することによってそれぞれの歌人の魅力ある歌の世界を描く評論集。（柊書房・3080円）

◇渡英子『しづかな街』　「戦火の絶えない世界へのほのかな希望を歌集題」に託した第5歌集。△一葉と晶子の歌を比べつつ霜月のシンポジウムは進む▽△レプリカの壁画への道に冬陽（ふゆび）差しゲルニカは静か、しづかな街だ▽（本阿弥書店・3080円）

◇梅内美華子『短歌うたことば辞典』　「NHK短歌」テキストに連載の「探索・歌ことば」「うたことば屋」を再編集して大幅に加筆した。古語から新語まで語意をわかりやすく説明して、例歌と共に鑑賞を付けた、作歌に役立つ辞典である。（NHK出版・3520円）

（歌人・中川佐和子）